

## エゴン・シーレ《座る男の裸像（自画像）》——分離派の伝統との関係性の再考——

下内 亮(京都大学)

エゴン・シーレ《座る男の裸像（自画像）》（1910年、カンヴァスに油彩とグアッシュ、152.5×150 cm、ウィーン、レオポルト美術館）は今日一般に、画家がグスタフ・クリムトの影響下から脱し、独自の表現主義へ移行したことを示す代表的作例と位置付けられている。この新奇で過激な様式が生じてきた経緯や影響関係については様々な視点で論じられており、近年はジェーン・キャリア等が特に造形芸術外からの影響（ダンスやパントマイム等）を主張している。しかしその議論は概して本作の独自性や新奇性をいささか無批判に受け入れ強調する故に、より「古い」近代美術の流れ、つまりクリムトとその周辺からの影響の可能性を積極的に問うてこなかった。

本発表はまず、1910年頃におけるシーレと「クリムトグループ」の関係の再検討から出発し、本作とその周辺作品（本作に近い形式の作品が4点知られている）の制作契機を「第1回国際狩猟展」への出品機会に求める。クリムトグループとはウィーン分離派から離脱したクリムトを始めとする芸術家たちの集団で、その構成員は分離派の当初の活動において本質的な役割を担った人々であった。国際狩猟展において彼らはヨーゼフ・ホフマンの構想の下、一様に「装飾的パネル」と題された絵画群でもって展示室を構成したのであるが、その在り様はまさに分離派の伝統、すなわち総合的空間芸術への志向を強く反映していた。このような場に展示する作品を構想する際にシーレが参照し得た先例が、続いて問われることとなる。

分離派の初期の活動を通じ、室内装飾のための壁画的絵画の領域においては「身体像の提示」のある特別な伝統が、フェルディナント・ホドラーやジョルジュ・ミンヌ等、国際的な流れを受けつつ醸成されていた。それはクリムトにも大きく影響し、著名な《ベートーヴェンフリーズ》で「様式化された、モニュメンタルな身体像」として結晶した。クリムトを敬愛し、1909年以前彼の作品を熱心に模倣していたシーレが、このフリーズや身体像の系譜に目を向けなかったとは考え難い。実際、《座る男の裸像》とその周辺作品及び関連する素描群を観察すると、モチーフ選択と様式化の手法において多くの要素をクリムト作品に負っていることが明らかとなる。従来、独自様式獲得の側面ばかりが強調されてきた本作だが、その特異な裸像の起源は実のところ、分離派やクリムトが形づくってきた造形上の伝統に深く根差していることが示される。

最後に、文献資料から窺える画家自身の評価を検討することで、本作の様式上の位置付けも再考が図られる。シーレは本作の内に、今日我々が積極的に認めるような芸術的飛躍を自認してはいなかった。画家が目指したものとその実現の限界への考察を通じ発表者は、本作はクリムトや分離派の伝統への参照をきっかけに生じてきたのであり、自身の様式獲得に向けた試験的・模索的段階の作品であると結論する。